

藤田省三の思想における 「経験」の形成と展開

李 啓 三

I. はじめに

藤田省三（1927-2003）は、「日本の精神構造」を一生の課題として取り組んだ思想史家である。藤田は、一般的に言及される場合には新聞による訃報記事が象徴するように、丸山眞男の学問的系譜に位置付けられ、「西欧近代主義的な価値観を尺度に、天皇制や明治国家の体制原理などを分析、批判した」（『朝日新聞』2003年6月4日付）日本思想史家としてであった¹。また、藤田は「非凡な目つき、理論的迫力」や「異端者」²、そして「丸山眞男の鬼子」³など思想家の個性を中心に知られているようである。しかし、藤田省三は近代天皇制の分析を中心にした思想史家にとどまらない幅と深さを持っていると考える。藤田が1950年代後半から丸山の学問的影響のもとで研究を始め、この影響を意識し続けた⁴のは事実であろう。ところが、藤田は、戦後日本における思想的課題をめぐって丸山の思想と同時にマルクス主義の影響を受け、これらと格闘するなかで独自の思想的道りを歩んできたと言える。

藤田は、1970年代末頃から1980年代前半までには「経験」概念を中心にした論考を発表する。これは、1960年安保闘争の敗北と、その以降に本格化した高度経済成長に対する藤田自身の思想的対応と言える。そして、藤田は、1980年代後半期には日本社会を「安楽への自発的隷属」による「安楽への全体主義」として、また、20世紀の近現代史を「全体主義の時代経験」として捉えることになる。それから藤田は隠遁と孤独の領域に沈潜し、1993年癌に罹患し体調を崩してからはこれ以上の思想的展開は行われなかった。

藤田が1986年に発表した論考「全体主義の時代経験」は、20世紀の世界を「戦争形態の全体主義」から「政治支配形態の全体主義」を経て、「社会の基礎的次元に達した根本的な全体主義」である「生活様式での全体主義」への展開として捉えた著述であり、これは天皇制研究からはじまった藤田の思想的旅程の終着点とも言えるであろう。ここで見逃してならないのは、藤田がこうした「全体主義論」にたどるなかで、高度経済成長がもたらした「精神の解体」を「経験の消滅」

として捉え直し、これを全体主義論に結びつけている点であろう。

現代的全体主義論と言える藤田の「生活様式での全体主義」は、「安楽への自発的隷属」と「全ての不快の素を無差別に一掃」⁵しようとする衝動をモーターとする。藤田にとって、こうした安楽への自発的隷属と裏面での不快の根元を一掃しようとする衝動は、「経験の消滅」という精神的状況と「経験の回避」という態度によって支えられるものである。

本堂明（2004）は、藤田の思想を「人を硬直化させてやまないおよそ全体主義的なものと生涯格闘し、それらの対極にある、人をして生き生きとさせてやまないものに絶えず一貫して注目し続けた」とまとめる⁶。このようなまとめに則して言えば、藤田において「全体主義」の対極にある「人をして生き生きとさせるもの」とは、「経験」であろう。

こうした藤田の思想における「経験」に関する先行研究には、藤田の「経験」が「他者認識」を通して成立する普遍主義であることを論じた市村弘正（2010）、「経験」の意味合いを高度成長期以降における日本社会の変化と関わらせて論じた趙星銀（2012）、そして藤田の後期⁷思想における「経験」をルカーチの「物象化」理論と関わらせて論じた乳深公佑（2006）などがある。ところが、藤田が「経験」に着目することになる経緯と、その形成原理を明らかにした上で、「経験」を天皇制的精神構造研究から全体主義論に至る藤田思想の「軸」とすえ、今日における思想的課題と関わらせる総合的研究はまだないと見られる。

既存の藤田研究は、藤田の思想的旅程を、①戦後丸山学派の一員として近代天皇制の分析から始まり、②安保闘争の敗北と高度成長期の到来に当たって激しい思想的模索と転換（あるいは「断絶」）が行われ、③「経験の喪失」論と「三つの全体主義」論に辿り着くことになったという三つの要素としてまとめ、分析している。そして、藤田自身が自ら「戦後世代の最終走者」⁸と名乗り、「戦後経験」にこだわってこと⁹に則して、藤田が行った作業は時代と立ち向かった戦後世代の思想的所産として評価される。これは、みすず書房発刊の『藤田省三著作集』（全10巻、1997～1998年発行）編集者である飯田泰三と宮村治雄の著作集解説や論考¹⁰に貫かされており、他の研究者の論考もこのようなまとめと評価を認めていると見られる。

藤田の思想が「日本近現代の精神構造を分析する尺度」として受け入れることができるためには、まず、藤田が「経験」にたどり着いた経緯を見つめながら、藤田における「経験」が形成される思想的原理が究明されなければならないと考える。従って、本稿は、藤田の思想における「経験」の形成原理を明らかにし、その展開過程を分析することを目的にする。

そのために、本稿は、三つの段階をもって進もうとする。

まず、藤田の論考における「経験」の用例を分析し、そこから見いだされる概念的特徴を西洋哲学の「経験」と比較することで、藤田の「経験」の生成原理－「時代との対決」－を抽出する。

二つ目の段階には、藤田自身の戦時期と戦後経験をもとにして、藤田思想の初期と言える 1950 年代後半において、戦後日本の思想的課題をめぐって丸山眞男の思想とマルクス主義と格闘するなかで「具体の弁証法」と「自己の函数化」という藤田の「経験」の生成原理が芽生える過程を描き出す。

三つ目には、藤田が安保闘争の敗北と高度経済成長が本格化する時期から行い始めた「古典の探求」作業を通して、丸山と異なる「歴史的経験」を見つけ、それに埋められている「経験の痕跡」を再生することで、現代における「経験の消滅」と立ち向かおうとする企てを見いだす。

そして、結論には、以上の議論をまとめる一方、藤田が終生行い続けた「研究会」という営み、主には「浪人時代」以降の「研究会」を通して、藤田における「経験」の原理と「経験の再生」という課題が具現される様子を描き出す。

II. 「時代との対決」という「経験」の生成原理について

II - 1. 藤田の論考に登場する「経験」の用例

藤田の論考において「経験」が中心的テーマとなるのは『精神史的考察』（1981）と『全体主義の時代経験』（1994）に所収された 1970 年代後半から 1990 年までの後期著述である。ところが、1950 年代後半からの初期論考にも「経験」は散見される。

藤田の論考において「経験」が初めて登場するのは「天皇制国家の支配原理」（1956）である。ここで、藤田は、明治中期の天皇制国家形成期に制定された「教育勅語」が日本近代国家成立の決定的な要素となるプロセスを説明する箇所ですべて「経験」を登場させる。この際、藤田は、「経験」を個別的主体が具体的物事をもって行う「普遍のとの交渉」と定義する。ここで重要なのは、藤田が「経験」を旧来の封建的習慣に過ぎない「日用」と区別し、「経験」とは「日用」と断絶することで成立するものとして捉えている点であろう。しかし、明治中期以降、「教育勅語」の制定から日露戦争を経て社会の基礎的単位にまで浸透した「儒教の極限的日用化」によって共同体の習慣が体制化することになり、近代日本の精神構造において「経験」の原理は成立することができなかつたと藤田は言う¹¹。このことからわかるのは、初期の藤田において「経験」とは「日用」として象徴される天皇制的精神構造と対峙するものだけということである。

また、「実感の意味」(1958)で、藤田は「実感」を通して「経験の意味を変えて行く」運動を提案する。当時盛り上がっていたいわゆる「戦前派」と「戦後派」の論争¹²のなかで、戦後派が「俺等を実感に拠っているんだ」と反論することについて、藤田は「経験」をもってこの事態の転換を図る。藤田にとって実感とは「感性のなかで抽象されたもの（強調は藤田）」でありながらも「具体性」を湛える存在である。さらに、実感とは「明らかな抵抗素を孕んでいる」ことで「経験」に通じるものである。すなわち、藤田は、戦後派が戦前派から道徳主義をもって攻撃された時、「実感」を単なる「アグレッシブな自己主張の契機」ととどまらせず、戦後派自身の戦時期や戦後における「経験」と繋げることを提案するのである¹³。ここでも、初期の藤田が「経験」にかけている重さが感じられる一方、「具体-抽象-具体」という「具体の弁証法」や「抵抗素」など藤田の「経験」の生成原理にまつわる思惟が窺える。

そして、安保闘争の敗北と高度成長期以降の思想的模索を経て、1970年代後半から本格的に藤田の論考に登場する「経験」には、確かに「高度成長」がもたらした「歴史的断絶」と「経験の消滅」、そして「経験の再生」という課題が前提されている。

藤田は、「戦後の議論の前提」(1981)で「戦後経験の第一は国家（機構）の没落が不思議にも明るさを含んでいるという事の発見であった」と言う。そして、没落した国家機構の外側で見つけられる「混乱・欠乏・悲惨とユートピア精神の両義的結合」に戦後経験の原点をすえる。そして、藤田は、石川淳の「焼跡のイエス」や野坂昭如の「マッチ売りの少女」などテキストの中でその姿を見いだす。しかし、こうした戦後経験は高度成長を経て徐々に消滅し、「断絶」を余儀なくされることになった。高度成長期がもたらした「断絶」について、藤田は「新品文化」(1981)で「消費社会」に進入していた日本社会の精神状況と結び付いて分析する。藤田は「新品文化」によって「もの」に刻み込まれていた「人間とものとの相互交渉の痕跡（「経験」）が残されていなくなり、「新品」という単なる「ツルツル所与」だけが存在するようになったと批判する¹⁴。

こうした「新品文化」のもとで機構化・制度化された社会に閉じ込まれたまま、現代日本の精神は、「自分だけの『体験』を重視することによって、制度の部品となっている中での気晴らしと『自分』の存在証明」を求めるようになったと藤田は言う¹⁵。そして、いくつかの対談と短評などを除外すれば自身の最後の論考となる「現代日本の精神」(1990)で、藤田は、現代日本の精神を「ナルシズム日本」という言葉をもってまとめる。

以上の「経験」の用例分析を通してわかるのは、藤田において「経験」とは、まず「歴史的な」ものであり、「抵抗素」を持つものだということである。また、

同時に明治期から現代に至るまで日本の全体主義的精神構造と対峙するものだというのである。さらに、「経験」は、「戦後」という一時期を除けば、近現代日本において持続的に「消滅」を強いられたものということである。従って、藤田は、本稿のⅣで詳述する「古典の探求」を通して、経験が消滅された現代において「再生」されるべき「歴史的経験」の姿を提示するのである。

Ⅱ - 2. 「時代との対決」という「経験」の生成原理

「経験」を論じる藤田の論考で、藤田自身が行った「経験」に対する概念的定義は、「人が物事と交渉するなかで主体の変形を遂げていく弁証法的関係」とまとめることができるだろう。これは、「人間と環境との関連の仕方やその成果の総体を意味するもの」¹⁶という西洋哲学一般の「経験」規定と類似すると見られる。しかしながら、Ⅱ - 1で見たように、藤田において「経験」が持つ最大の特徴とは、あざやかな「歴史性」あるいは「時代的な」要素が込められている点ではないかと考えられる。そして、藤田は、こうした「物事との弁証法的関係」言い換えれば歴史的存在との交渉を通して「他者への認識」という「普遍的精神」を遂げられるものとして「経験」を捉えていると考える¹⁷。

こうした藤田の「経験」は、「一定の歴史的、社会的現実における人間の全行動にまで拡大された」点や、「人間の行動や認識のすべてをよりのぞましい経験を獲得しようとする試み」という点においては、デューイやプラグマティズムにおける「経験」に近づくものと見られる。しかし、藤田の「経験」がデューイやプラグマティズムと分かれる点は、それらが「よりのぞましい経験の獲得のため効率的に経験の系列中に位置付けようとする」¹⁸ことに比べて、藤田は交渉のなかで生じる「対立と葛藤」を重視するところにあると考えられる。

藤田は「或る喪失の経験」(1981)で「人が物と立ち向かう瞬間、もう、こちら側のあらかじめ抱いた『恣意』は、その物の材質や形態から或いは抵抗を受け、そこから相互的な交渉が始まる」と言う¹⁹。この際、藤田が言う「恣意にかけられた抵抗」からはじまる人と物(他者)との「対立と葛藤」によった交渉の過程は、ヘーゲルが『精神現象学』で論じた「意識の自己喪失から、知の非実在性への確認を経て、絶対知に至る意識の自己否定の運動」²⁰を思わせる。ところが、藤田の「経験」が抱え込んでいる「対立と葛藤」とは、歴史的・時代的環境が形作った条件と対決する、前述したような「抵抗素」を抱えているところに最大の特徴があると考えられる。

さらに、藤田は『天皇制国家の支配原理』第2版へのあとがき(1995)で「『対立のない所に関心は生まれぬ』というような意味のことを言ったのは確かヘーゲルだったと思うが、対立面を通じて結合することによって生ずる『議論する関

係』は天皇制にたいする反対物である」²¹と述べたことからわかるように、藤田は「対立と葛藤」の存在を全体主義に対する抵抗の源泉として捉えている。

以上から見たように、藤田は「対立と葛藤」を生じさせる物理的原点に「経験」をすえており、この意味で「経験」は、Ⅱ-1で見た通り「全体主義」の向こう側に位置付けられる。したがって、藤田自身にとって「経験」とは「全体主義時代との対決」そのものであったとも言える。

「時代との対決」にまつわる藤田の思想的態度を窺える二つの発言がある。一つは「天皇制国家の支配原理」（1956）を発表し、研究者として知られはじめた時期（1957）の発言である。ここで、藤田は「自分を歴史的に相対化する」課題において受けた「マルクス主義の歴史哲学」からの影響を言及した上で、「強制権力のない、自由な個人の、自由な共同体を望む点では、私はアナキストですよ」と自身を規定する。続いて、藤田は「私は本来政治が嫌いなんですよ。それでいま政治学をやっているというのは、喧嘩するためにやっているようなものです」と告白する²²。また、晩年期に行った徐京植との対談（1994）では、「人は、断絶も含めてそれぞれの社会関係と時代（時代の一定空間）の中で、対決のあり方の面で変化しながら生きるものだと思うのです。そしてそれが一貫性というものだと思っています（強調は引用者）」と言う²³。

こうした初期と晩年の発言から藤田の「時代との対決」という一貫した原理が見つかる。そして、これに藤田自身も気づいているようである。藤田にとって重要なのは、自己思想の「体系」ではなく、「時代との対決」そのものであり、そのなかで形つくられる「時代経験」ではないかと考えられる。

Ⅲ. 初期の藤田における「経験」の形成

Ⅲ-1. 藤田自身における「時代経験」

藤田は1927年愛媛県今治市に生まれた。両親は瀬戸内海の今治市沖合にある大三島出身で、藤田は幼年時代、今治市と大三島を往き来しながら過ごしたと言う。父親は小学校の代用教員を勤め、母親は産婆をして家計を助けていたと言う²⁴。大三島は、作家の石牟礼道子との対談記事から見ると、「先祖代々中央執権に反対」し浄土真宗の影響のもとで自治の伝統が残っていた島であり、「日本の平均でいえば貧農の部類に入るが、漁業など採集経済のため貧乏を感じられなかった」と言う。また、藤田はこの島を、「一握りの大豆を借りてくると返すときは多目に返す」相互性の礼儀や、「お葬式がある時、香典として大豆一握りしか持ってこないで子供をたくさん連れてきた貧乏の人たちのため、貧乏でない人

は米二升を持ってくる」と言ったような、相互扶助の伝統が生き生きと残っていた場所として回想する²⁵。

今治市での小学校時代には、港の棧橋近くに集まる香具師（言葉巧みな口上や見せ物的な芸で、粗製の商品などを売ることを業とするもの）を好んでおり、香具師の口上を全部暗記できるくらい繰り返して聞いて回っていたと言う²⁶。

藤田は「諒闇の社会的構造」（1980）で、大正天皇死後のいわゆる「諒闇」の時期、「歌舞音曲停止措置」に対して青森警察署に出頭し、その解除を訴えた盲目のジョンカラ節芸人たちについて「一定の直接生産者の生活と結びつき、そういうものとして『諒闇』の国家儀礼に対して『存在』において対抗していた」と評価する²⁷。藤田が彼たちをこのように捉えることができたのは、香具師などにまつわる幼年時代の経験が醸し出したある感覚に基づいていると見られる。こうした下層民の生活感覚に潜みこんでいる国家や法律に抗する志向の「経験」は、藤田においては近代主義的ナショナリズムとは異なる、「原人」にまつわる思惟として藤田の思想に根付くことになる。

また、軍国主義者の教師たちをやりこめる少年たちの戦時中の「非行」を描いた「不良精神の輝き」（1984）は藤田自身の今治中学時代の経験に基づいている。

もともと、藤田は兄二人と姉二人の末っ子であったが、姉一人は夭折、また兄二人はいずれも太平洋戦争の末期にそれぞれ沖縄とフィリピンで戦死した。「生まれつきのニヒリスト」でありながらも「優しくて友情に篤い」人柄で「ぼくは彼が好きだった」と回想する²⁸。藤田の長兄は、特攻隊員として沖縄で突入させられて死んだと言う。1980年代の初め頃、同僚であった飯田泰三と共に沖縄旅行をしたとき、飯田が「沖縄本島南部の戦跡のほうに行ってみたいか」と誘ったが、藤田は「そこは長兄が戦死したあたりだから行きたくない」と話したと言う²⁹。

終戦当時、藤田は陸軍士官学校乙種生徒として埼玉県朝霞で訓練を受けていた。同年5月と7月には二人の兄が戦死し、おそらく自分の死をも予感していたはずの藤田に、突如と終戦が訪れたのである³⁰。

幼年期から青少年期を経て終戦に至るまでの藤田の記憶と、これを回想する語りに目立つのは、大三島の自治と相互扶助の雰囲気や、香具師など下層民世界が持っていた活力とこれに対する憧れ、軍国主義への一抹の反感、そして二人の兄の死と自分の死まで予感させたファシズム体制への憤怒である。これらは確かに藤田の「時代経験」の元基をなすと言えるであろう。

ところで、藤田自身が「模範的軍国主義家庭」に生まれ育ったと言った通り³¹、終戦は藤田には「一大ショッキングな事件」で「ガンと頭をぶんぐられて脳震盪を起こす」出来事であった。そして、藤田は、「一度改めて周囲を見渡した

ときに見開かれた世界の、その拡大さと豊かさに仰天しながら一生懸命やった」と言いつつ、これを「戦後の精神史の出発点」と名づける³²。藤田が「戦後、国家（機構）の没落が不思議にも明るさを含んでいるという事の発見」と言った際、これは、藤田自身においては死の寸前のところ、すべての崩壊からまったく新しい世界の到来という逆転の「時代経験」がもたらした感覚に基づいているものかもしれない。

そして、「まさに怒濤のごとく」押し寄せてきた戦後文化の復興のなかで、藤田は丸山眞男の思想とマルクス主義と出逢うことになる。

Ⅲ - 2. 戦後日本における思想的課題、そして丸山眞男の思想およびマルクス主義との出逢い

よく知られている通り、藤田が丸山の思想と出逢ったのは、丸山の論文「超国家主義の論理と心理」（1946）と「軍国支配者の精神形態」（1949）からである。そして、藤田はほとんど同じ時期にマルクス主義に接することになる。藤田は、レーニンの『唯物論と経験批判論』を読んでからそこでレーニンに批判されているエルンスト・マッハの著作を読むためドイツ語の勉強をし始めたという。また、松山高校時代に自ら歴史学研究会をつくり、マルクス主義歴史学（たとえば日本荘園史）およびいわゆる講座派マルクス主義の日本資本主義分析などを学んだという³³。

ここで興味深いのは、終戦直後に藤田が丸山の近代主義とマルクス主義と出逢った時、藤田自身は「僕には大塚（久雄）先生も丸山先生も、それから石母田先生も区別が付かなかった。正直に言って、ほんとうに同じものだと見えたんです」³⁴と話している点である。すなわち、藤田は、丸山などの近代主義とマルクス主義を同類として受け止めたということである。むろん、「ぼくの精神史とは方法的にはマルクス主義との格闘の歴史であった」と断言する³⁵丸山の思想とマルクス主義の差異について、藤田は直ちに気づいたようだ。

ところが、こうした藤田の告白は、崩壊状態から新しい創造の熱気のなかで乱れたまま盛り上がっていった戦後初期の思想的雰囲気を思わせる一方、藤田の思想の形成とかかわっても示唆に富むと考えられる。すなわち、藤田が自ら経験した日本ファシズム体制と軍国主義から脱するため設定していた思想的課題においては、丸山の思想とマルクス主義が共有するところがあるということである。そして、これこそ、藤田が戦後において丸山の思想とマルクス主義に取り組むことにした原動力となるかもしれない。また、にもかかわらず藤田には、丸山の思想とマルクス主義が共有していた問題意識とは異なる要素があるということである。これは、その後行われる藤田の格闘を予感させる。

まず、藤田が想定していた戦後日本における思想的課題について見てみよう。これを一言で言えば、「天皇制的精神構造あるいは日本の精神風土から脱すること」であろう。詳しく言えば、「(日本の精神風土には)『天皇現人神』とのようなイデー(理念)とダーザイン(存在)がくっついているので、この二つを区別しない場合には、どうしても『日本的な共同主義』になってしまう」³⁶ため、「理念と現存在が混在する『日本』という混沌の中から両者を切断して『普遍的なもの』をつかみ出そうとする」³⁷という課題である。

藤田は、日本の精神風土において「イデー(理念)とダーザイン(存在)がくっついている」パターンを三つに分けて考えていると見られる。

一つ目は、「権力」(存在)のなかで「道徳」(理念)がもぐり込んでいる天皇制国家の枠組みから醸し出された精神的風土である。これは、藤田が強い影響を受けた丸山の論文「超国家主義の論理と心理」(1946)で指摘されるように、自由なる主体的意識と倫理の不在がもたらす「抑圧の移譲による精神的均衡の保持(傍点は丸山)」³⁸として現れる。また、これは「軍国支配者の精神形態」(1949)から見れば、日本ファシズムを担っていた為政者の矮小性と「日本ファシズム支配の龐大なる『無責任の体系』」³⁹として現れる。

二つ目のパターンは、天皇制ファシズムの情緒的基盤をなすと言える「欲望自然主義」である。藤田は、「天皇現人神」のような「理念と存在の合一体」をそのまま肯定してしまう日本の精神風土を「欲望自然主義」と名づける。藤田は、たとえば、農本主義者で1932年に起きた「5.15事件」に参加した橋孝三郎が言ったような「聖なるか賊か是か非か問ふ勿れ、ただひたすらに祖国抱きて(傍点は藤田)」とか、「ただすべてに感謝悦服あるのみです(弟子の林正三の書簡から藤田が引用)」など、自然の運命へ徹底的に従順するこうした「欲望自然主義」が「日本ファシズムの国家改造をキレ目なく行わしめた基体であった」と評価する⁴⁰。

「イデー(理念)とダーザイン(存在)がくっついている」三つ目のパターンは、「ズルズルベッタリの状況追随主義」という日本の精神風土として現れると藤田は見ている。藤田は「昭和8年の転向の状況」(1959)で、戦前マルクス主義運動の一つの流れと言えるいわゆる「福本イズム」⁴¹を批判する。ところが、藤田は、福本イズムによって「ズルズルベッタリの状況追随主義」から断絶して日本近代において初めて「理論人の形成」を成し遂げたと評価する⁴²。

かくして、藤田は、抑圧の委譲と無責任の体系を越えるため、また、目の前のことをそのまま肯定し追随することなく、省察と批判を可能にする「普遍者の形成」を戦後日本における思想的課題として設定したのである。この点においては藤田が見る限り、丸山眞男や大塚久雄が掲げた「近代的主体」と羽仁五郎や石母田正が掲げた「人民」の区別がつかなかったのかもしれない。

ところが、藤田における丸山 of 思想とマルクス主義とは、あくまでも「方法的存在」であったと言える。藤田は、「抽象」そのものであり「到達するべき目標」として想定された丸山の「近代的主体」には批判的であり、マルクス主義の「人民」についても「神のない日本の国に神を創ることになる」⁴³と批判した。以下に詳述するが、藤田は、丸山 of 思想とマルクス主義と格闘するなかで、これらとは異なる「経験」の原理を形成していったのである。

Ⅲ - 3. 「具体の弁証法」⁴⁴と「自己の函数化」⁴⁵という原理の芽生え

藤田の初期論考のなかで、久野修・鶴見俊輔の『現代日本の思想』に寄せた書評「『現代日本の思想』の思想と書評」(1957)には、抽象的理論より「具体」のものへの着目、想定された「主体」ではなく実在する「自己」への視線が見いだされる。

近代精神とは現代日本の精神構造からかけはなれた目的にすぎないから日本伝統に対する主体的理解がない限り(丸山などが提起した)「主体性」の主張は現実の主体が自らを内面的に自覚して自己を疎外者に対して防衛し、或いは確立しようとするものではなかった。主張される「主体性」はしばしば主体なき「主体性」になっていたといえよう(強調は引用者)⁴⁶。

「日本伝統に対する主体的理解」については後述するが、ここで批判されているのは、丸山などが戦後民主主義の大前提として掲げた「近代的主体の確立」という課題であろう。重要なのは、丸山などがかけた近代主義の理念(抽象)に対する藤田の批判的思惟が、あくまでも「現実(具体)」と「自己」という尺度をもって展開されている点ではないかと考える。すなわち、藤田は戦後民主主義をめぐって、「自己」と「現実」という尺度をもって、「近代的主体の確立」という到達点として設定される近代主義的思惟の外側に思惟の立地点をすえているのである。そして、この文章で登場する「自己」とは、ナショナリズム的な主体ではなく、あくまでも藤田自身を含めて同じ戦後経験を共有する同時代人という「現実の主体」を指していることに気をつける必要がある。

また、藤田はこの文章で、当時の日本共産党の「理論優位の思想」を批判する箇所「理論以前の或は理論を越えた生活契機すなわち信念ベリーフや情緒や衝動や処世智(強調は引用者)」の重要さについて言及する⁴⁷。こうした「理論」より「理論以前と理論を越える」ものを含める具体的生活世界に着目する姿勢は、たとえば公刊された藤田の最初の論文「天皇制とは何か」(1954年、平凡社刊「政治学辞典」所収)で『家』の天皇制、『街』の天皇制⁴⁸など生活様式にまで浸透した天皇制

の領域を設定することから、晩年期の「生活様式での全体主義」論に至るまで一貫した姿勢であったと言える。

「抽象的理論」より「具体的生活世界」に思想の原点をすえる姿勢、そして「現実の主体」をもって「経験」に詮索する姿勢は、藤田自身の「時代経験」に基づき、「普遍者の形成」という思想的課題をめぐって丸山の思想と日本マルクス主義と格闘する中で形成されたものと言える。

藤田は、1959年～1961年に筑摩書房刊行された『近代日本思想史講座』第2巻『正当と異端』⁴⁹の準備作業として丸山が主宰した「正統と異端研究会」に参加し、丸山と論争を展開する。藤田は、丸山が昭和10年代からいわゆる「講座派」と共に日本マルクス主義の一つの軸を担っていた「労農派」が日本において純粋経済学を確立した意義を評価することに反発する。藤田は、講座派がスローガン主義という瑣末主義に陥ったと言え、労農派は原典復帰主義という瑣末主義になったと言う⁵⁰。これは、理論（抽象）そのものを純粋経済学という形で収め、現実（具体）との弁証法的連関を失い、講壇アカデミズムに復帰してしまった労農派に対する批判である一方、こうした労農派を擁護する丸山の近代主義的学問観への批判も含まれていると見られる。藤田は、現実の政治と理論を分離するべきだという「丸山先生の年来の主張」を挙げながら、労農派の講壇アカデミズムが「帝国大学とくっついていた『帝国』と『学問』を切り離して学問の自立を成し遂げた」が、「帝国大学から学問を解放することを意図することができなかった」と言う⁵¹。こうした批判の矛先は労農派だけでなく、丸山にも向かっていると考えられる。

丸山は、倫理的概念など超法学的概念を全部排除するケルゼンの「純粋法学」をモデルにして「純粋政治学」の構想を披露したことがある⁵²。これに対する藤田の批判は「講壇アカデミズム」対「現実参与」という図式を踏襲しているものではない。むしろ、藤田は、こうしたアカデミズムの現実参与論理に対して「現在反アカデミズムの構造」（1959）で、「良いものはなんでも本質的に『学的』だと考える考え方が伏在している」と指摘し、これは「最悪のアカデミズムである」と強く批判する。ここで藤田は、学問とは「全能とは全く逆に自らの限界をきっかりと守る」ことが理想的状態と前提する。ただし、学問とは現実に着目し、それとの分離を明らかにした上で、「つくられた法則」を自ら「更めて現実と関わり合せる」ものであると説明する⁵³。

要するに、藤田は、丸山や労農派の純粋学問にこだわる「姿勢」ではなく、「具体的現実との弁証法的連関」の喪失と、純粋学問という探求対象のなかに「帝国大学に属している『自己』」という探求主体が含まれていない、言い換えれば、こうした純粋学問が持つ「性格」を批判するのである。

こうした藤田の観点は、「昭和8年を中心とする転向の状況」（1959）においても著しく現れる。藤田は福本イズムの主な問題点を「超越」に対する二つの誤った観点に因んでいると見ている。一つは、「超越とは超越せられるものからの拘束を受け続けているのみ生ずるもの」であるが、福本イズムはこうした「超越の弁証法を失った」⁵⁴という点である。すなわち、福本イズムの「理論人」とは、超越しようとする「経験的現実世界」（具体）から拘束されることなく、（抽象的）理論そのものだけを「一元的で全稱的に」受け入れたということである。

もう一つは、超越しようとする対象のなかで「自分」を含まない点である。藤田は、これを「学校生活を通じてつねに優等生であったことを手放して誇っている」福本和夫が「現地から直輸入したマルクス主義をすべての点で唯一無二の正しき理論であると考えたこと」と深くかかわっていると言う。すなわち、福本イズムとは「自分の『狭い生活』を超越するのと正に逆に、自分の『狭いコース』の型を実体化するものに他ならない、自己の超越を含まぬ日本からの超越論（強調は引用者）」に過ぎないということである⁵⁵。

初期の藤田は、丸山の思想とマルクス主義の影響のもとで「天皇制的精神構造」との戦いをおこなった。ところが、以上に見たように、藤田は、丸山の思想と日本マルクス主義が持つ「抽象」の体系、また探求対象のなかで「自己」の領域を設定しない「純粹学問」へのこだわり（丸山）と「理論人」的観点（マルクス主義）について批判的意識を持つようになった。このようにして、初期の藤田において「自己が含まぬ抽象的理論」の向こう側に、必ず自己が介在され、具体的実物として存在する「経験」にかかわる思惟が芽生えるようになったたのではないかと考える。

IV. 安保闘争の敗北と高度成長期以降の「経験」の展開

IV-1. 戦後の終焉と自己の分極、そして「安保闘争」

藤田思想の初期は、日本社会が朝鮮戦争の特需以来始まった高度成長が加速化する時期と重なる。この時期、経済企画庁が発刊した『経済白書』（1956）では「もはや『戦後』ではない」という「戦後の終焉」が宣言された。また、この時期に冷蔵庫・洗濯機・炊飯器が「三種の神器」と呼ばれるなどとして、消費文化が生活のなかで浸透し始まった。さらに、1955年には自民党を軸とするいわゆる「55年体制」という保守優位の政治構造が完成された⁵⁶。

藤田は、Ⅲ-3で触れた『『現代日本の思想』の思想と書評』（1957）で、すで

に「戦後は終わった」という状況を認めている⁵⁷。そして、藤田は、2年後に書いた「喜劇的状况の問題性」(1959)でこう述べる。

戦争中から僅か10年余りの近い時間的距離しかないのに、生活様式や日常の感覚や精神状態の方は、当時から遥かに遠く距っている。精神の基底に存在して強い規制力を発揮する過去の意識と現在感覚との間に強い大きなギャップが生まれている。「生きてきた人間としての我は生きている人間としての我になにかそぐわないもの、軽薄なものを感じ取り、逆に現在人としての我は在来人たる私の感覚上のアナクロニズムを目してスムーズな行動を妨げる何か鈍い障害物であるように感じ取っている(傍点は藤田)⁵⁸。

ここで感じられるのは「戦後は終わった」という時代認識のもとで高度成長期の初め頃を生きている藤田自身の違和感が醸し出した「自己内の分極」であろう。そして、見逃してはならないのは「在来人たる我」と言った際の「在来人」あるいは「生きてきた人間」という存在である。ここで「在来人」とは、藤田自身が終生戦後精神なるものに固執し続けたことを踏まえれば、「戦後経験」を自分の原点にすえる姿勢に基づいた表現であろう。また、「在来人」とは、藤田が安保闘争の原動力として提示した「原人」(ウルメンシュ)でもあり、みずから「亡命」⁵⁹と名乗った2年間のイギリス滞在から戻って「高度成長反対」(1969)を叫んだ以降、大学を辞めてから『精神史的考察』(1981)で実るまで行い続けた思想的模索、Ⅲ-3で触れた藤田の言葉を借りれば「日本伝統に対する主体的理解」の出発点でもあろう。

そして、1960年の「安保闘争」に際して藤田は、「戦後15年は無駄ではなかった」⁶⁰と自ら興奮の気持ちをもって安保闘争に参加し、多方面で活躍した。藤田は、安保闘争の直後であった1960年9月『日本読書新聞』座談会で「精神的潮流の面でいえば、安保闘争を構成していったものは、ヤミ市的状況の精神ではないか」と言う。藤田は、「戦争末期からの4、5年か間の、ヤミ市的状況」から生じられた「法律の外で自分で生きようとする」自然的権利感情を「原人性」と規定する⁶¹。藤田は、この「原人性」の一つの現れとして、藤田自身が長い間住んでいた東京都中野区の江古田地域に戦後民主化運動の時期に自発的につくられた集団として実在した「交換所」を取り上げる。藤田は、これを「権力から独立し、ヤクザが支配するヤミ市とは異なる、戦後の自然状態から形成された新しい社会契約」であったと評価する⁶²。

こうした藤田の「原人性」は、丸山の「国民主義」とは真逆の発想であろう。丸山は戦時期発表した「国民主義の『前期的』形成」(1944)で、江戸時代末期

に蔓延した利己心と保身主義にたとえて戦時期のヤミ市的状況の精神構造を強く批判する。そして、丸山は、福沢諭吉の言葉を借りて「全人民の脳中に国の思想を抱かしむるという切実な課題（傍点は丸山）」⁶³を提起する。藤田の「原人」は、こうした近代的国民主義が孕んでいるナショナルな体制の外側にいるのである。

その一方、丸山は安保闘争の時期『中央公論』の座談会で、「15年前の日本をもう一度ふりかえてみると、共通の基盤の原理は日本国憲法以外にはありえないでしょう」と言う⁶⁴。ここでも、憲法や国民主義とのような抽象的原理のもとで、ナショナルな体制のなかで近代的主体の在処を探し求める丸山と、近代的国家機構や想像されたものとしてのナショナルな体制の外側で「実在した歴史的経験」を探し求める藤田は、明確に対比されると言える。

IV - 2. 高度成長の本格化と嶋中事件、そして「古典の探求」

藤田の年譜によれば、1962年～1964年にかけては「空白期」が見つかる。藤田は、1961年3月起きたいわゆる「嶋中事件」⁶⁵と、これの余波で自身が携わってきた雑誌『思想の科学』の「天皇制特集号」（1962年1月号）が発売直前に破棄されるいわゆる「思想の科学事件」に当たってそれぞれ書いた文章から1964年6月まで約2年半には、いくつかの対談と短評以外の本格的論考は書かなかった⁶⁶。

藤田は安保闘争の敗北や高度成長による「体制の安定と社会機構の再確立（傍点は藤田）」⁶⁷が進むことに注目していた。そして、藤田は、自身が戦ってきた「天皇制的精神構造」が清算されるどころか、より根強く日本社会に定着していくことを見つめており、二つの事件をその症候として受け止めたかもしれない。

約2年半の沈黙の終わり頃、藤田は「人民主権の精神的一条件」（1964）を発表する。東京オリンピックが行われ、日本復興のセレモニーが盛り上がっていた時期、藤田は「前の時代の人々が打ち込んで生産した精神的遺産」に対する「歴史責任」、そしてこれらへの「内在的検討」という課題を提示する⁶⁸。これから藤田は、「日本伝統に対する主体的理解」と言える作業に取り組むことになる。天皇制精神構造を中心にして近代日本における思想的課題に取り組んできた藤田は、こうした「对象的転換」について、1974年に刊行された『現代史断章』序文でこう述べる。

壁につき当たったら後を向いて見るとよい場合がある。過去の歴史的経験が広く眼前に広がっているので、つぶさにそれらを検討することが出来る筈だ。魯迅がやったように、自分の「閉塞感」や絶望に溺れ込むことを拒んで、それに対して絶望的に戦っているならば、過去へのロマン主義的陶醉ではなく

て逆にするとく内在的な検討が出来る筈だ。いくら「八方ふさがり」でも上下は空いているだろう。最小限、下の方に掘ることはできる。深さへの到達だ⁶⁹。

この文章で藤田は、「古典の探求」の動機として「歴史的経験」の存在を挙げている。だとすれば、藤田はなぜ「歴史的経験」を探し求めることになったのか。藤田が「壁につき当たった」と感じた時とは、自ら経験し「経験の古典」と名づけた「戦後経験」が消え去ったと感じられる時期である。日本社会は徐々に機構化・制度化され、戦後経験が含んでいた「他者認識」への欲求は「『自分』の存在証明」への欲求として代替されていくわけである⁷⁰。従って、「経験」がその原理として率いる「時代との対決」の姿勢が失われ、「具体的（自己）規定と限定とを失った、ただの抽象的な欲求」⁷¹だけが残るわけである。こうした「経験の消滅の時代」を前にして、藤田は「古典」という地層を掘ることで、新しく発掘された「歴史的経験」を見いだそうとする。かくして、藤田は、それに刻み込まれている「相互性の痕跡」を甦らせることによって「経験の再生」を企てるのである。

IV - 3. 藤田の「歴史的経験」の探求

丸山は、藤田が古典の探求に取り組んでいた時期とほとんど重なる時期、いわゆる「古層論」と呼ばれる論文を発表する。丸山は、1970年代高度成長につれて戦前期の日本主義が進化しているという問題意識⁷²に基づき、古代以来、日本の歴史叙述と歴史的事件に流れている「執拗低音（basso ostinato）」の様子を究明しようとした。丸山は、この作業を行う自身の念頭にあったものについて、こう述べる。

「自分は何であるか」ということを自分を対象化して認識すれば、それだけ自分の中の無意識的なものを意識のレヴェルに昇らせられるから、あるとき突如として無意識的なものが噴出して、それによって自分が復讐されることがより少なくなる⁷³。

丸山の「古層論」とは「自分が復讐される」ことへの懸念に動機づけられたものであり、ここで「自分」とは、丸山が自ら設定した「西欧近代」という普遍者と立ち向かっている、抽象的でナショナルな存在であろう。こうしたナショナルな「自分」の中で、「西欧近代」という普遍者と日本より遠いところにある「他者」とは、どのような存在であろうか。これに関わって小熊英二（2002）は、「丸山たちはアジアへの戦争責任という意識は欠けがちだったし、朝鮮・台湾への視線も冷淡だった」と批判する⁷⁴。

これに比べて、藤田における「伝統に対する主体的理解」は、丸山と異なる問題意識をもって行われたと見られる。主に1970年代後半に書かれた論考を収めた『精神的な考察』（1981）で藤田が探し求めた「在来人」とは、「西欧近代」など想定された普遍の尺度ではなく、国家機構と法律の外側に実在した「原人」の姿であり、藤田はこれを向かって遡るのである。

そこで藤田は、「自らの生活様式における異質」をもって明治時代の歴史的変質と対立して「自ら選んで裏店世界で個人的形態の『大飢饉』を生きた」中江兆民を見つける⁷⁵。さらに、藤田は、悲憤慷慨の愛国者ではなく、幕末-維新期、全社会の崩壊という状況を一人の中から体现し、「全力を尽くして物に当たっている者」であった吉田松陰の「時代経験」を描き出す⁷⁶。

一方、藤田は『保元物語』で、「専制法皇鳥羽の生命を一言のもとに制圧し、古代社会の終焉と中世的動乱の開幕を宣言した一介巫女」を見だし、これを通して異端的呪術がまだ古代帝国の向こう側に生きていた世界を描き出す⁷⁷。ついには藤田は、高度成長期がもたらした精神の解体と立ち向かうため、「隠れん坊」や「成人式」など人類共通の経験のなかでイキイキしていた「相互性」の塊としての「経験」という水脈を見つける⁷⁸。

このようにして、藤田は、高度成長期以降、日本の精神構造にもたらされた変容を「特別の断絶」と「墮落の一般化」と受け止め⁷⁹、国家機構や想像されたものとしてのナショナルな体制の外で、実在した「歴史的経験」を見だし、これをもって「経験」が消滅した現実に差し戻そうとした。

IV. 結論

藤田は、先に触れたように、自らアナキストと名乗るほど国家機構や法律などに対する対決意識を持っていて、近代思想が抱え込んでいる抽象的理論主義的性格にも問題意識を持っていたと考えられる。藤田は、戦後日本における思想的課題に取り組むなかで、丸山の近代主義とマルクス主義が共有する、想定された「抽象的理論」をもって「自己を含まぬ」まま樹立される普遍的・客観的学問の体系に問題意識を感じつつ、具体的生活世界に着目し、自分のことを函数化してからこそ成り立たせる「経験」の原理を探し求めたと考えられる。

そして、藤田は、日本における全体主義と対決するためには、こうした丸山 of 思想とマルクス主義を乗り越えることが必要だと考えていたかもしれない。このような判断に則していえば、藤田における「経験」とは、こうした「具体の弁証法」、「自己の函数化」をもって藤田自身が終生行い続けた「全体主義の時代との対決」の方法的原理であったと言える。

このようにして、藤田の「経験」を支えているこうした三つの原理は、藤田自身が丸山の「純粹学問へのこだわり」と「ナショナリズム」、そして戦後マルクス主義の「瑣末化」と格闘するなかで形成され、藤田がそれらと切り離せるようにしたと考えられる。

また、こうした「経験」の原理は、藤田において国家や法律の外側に生きようとする人民の志向に戦後経験の原点をすえることにし、戦後思想において希有なる「野生性」の思想を作り上げたと考えられる。

さらに、こうした「経験」の原理は、市村弘正（2010）が「おそらく同時代の中で藤田ほど高度成長の腐食力に脅威を感じ、危機意識を抱き続けた思想家は希少だった」⁸⁰と言ったように、1970年代以降の藤田の思想的営みにおいて、藤田が「経験」そのものに全重量をかけることを通して現れたと考えられる。

最後は、藤田における「経験」の原理と「経験の再生」という課題が具現される様子を見よう。藤田は、思想とは具体的「場」と「関係性」のなかで存在するということを自覚していたと見られる。これは、藤田が丸山の思想などと格闘する原因となる一方、「抽象」的理論をもって「自分」のことを対象に含ませることに躊躇うアカデミー社会と不和であり続けることにしたと考えられる。

藤田の思想的旅程の終着点と言える「全体主義の時代経験」（1986）には、次のような記述がある。

人間の最後の健全を保つには、病者を含めて、具体的な現象性と性格的独立性の維持が決定的であるように思う。「健全を戻せ！」その健全は具体性と現象性のなかにこそある。と言うのが、全体主義という、文明の終末形式が全面支配を達成した所での唯一最高の教訓である⁸¹。

藤田が自分自身の日常でこうした具体性と現象性を具現する媒体とは「一緒に読む」という研究会活動ではないかと考えてみる。藤田は、1950年代後半から鶴見俊輔や丸山眞男などが主宰した様々な共同研究に携わってきており、法政大学を辞職した1971年以来には「日本の大学は決して大学ではない」⁸²という判断のもとで、みすず書房・岩波書店・自宅など様々な場所で、編集者、大学教員時代の教え子、大学院生、社会団体活動家、一般市民などと研究会を行いつづけた。雑誌『みすず』2003年10月号の藤田省三追悼特集記事には、大腸癌に罹患し闘病中でありながらも自宅で中国人教え子と共に研究会を行い続ける藤田の姿⁸³をはじめ、「研究会」をめぐる様々な思い出話が出てくる。

藤田は『精神史的考察』（1981）のあとがきにおいて、これを「多様性と相互的葛藤を含む小さな社会であった」⁸⁴と自評する。藤田が「研究会」に込めたこの

ような意味合いに、藤田が考えた「思想のあり方」がとけこんでいるのではないかと考える。これは、Ⅲ-3で触れた「学問の全能と限界」にかかわるものであり、これについて富山一郎（2019）はこう述べる。

思想は人間世界全体にかかわるが、責任は部分的にしか負えないということであり、それを意識しなければならないということである。と同時に、責任とは責任を負えないことを無理にでも担い続けようとするプロセスにおいてはじめてとらえられるのであり、全体（トータル）とはこの無理に担い続けるプロセスにおいてしか存在しないということである⁸⁵。

藤田における「研究会」とは、大学の外で行う一般人向けの講義のような単なる啓蒙の手段ではなかったと考えられる。藤田は「全体を無理に担い続け」ようとし、この重荷を分担することができる関係性と場を探し求め、「葛藤と多様性」を形成の原理とする「小さな社会」を作ろうとしたのである。富山一郎（2019）は、藤田の研究会について、「個では到底対応できない経験を、読むという行為において再組織化していく営み」であり、「既存の集団から離脱しながら、論じることが部分的であるにもかかわらず全体を目指そうとするとときに生まれる新たな集団性」を志向する場所であったと評価する⁸⁶。

こうした評価に則して言えば、藤田において「研究会」とは、知識人である藤田自身が「時代と対決する」もう一つの方法であり、その場でなされる議論とつくりあげる関係性をもって、共に「具体的な現象性と性格的独立性を維持しようとする」営みであったと言える。そして、藤田は、ともに読むという行為をとおして「自ら」経験の再生という思想的課題を実践したのである。

こうした意味で藤田の「研究会」は、藤田の思想を支える三つの原理が接続する決節点ではないかと考える。藤田省三の「経験」と、これを支える三つの原理、そして藤田が最後まで尽力した「研究会」を通して見えるようになる藤田の生涯と思想は、今日における思想のあり方を考えさせられる。

注

- 1 和田悠「『藤田省三世界』の成立」『現代思想』第32巻第2号（青土社、2004年）、p.186から引用。
- 2 李順愛「在日朝鮮人の目線から見た藤田省三」『全体主義の時代経験』（韓国語版、イ・ホンラク訳、チャンピ、2014年）、p.11。
- 3 趙星銀「訳者解説」『精神史的考察』（韓国語版、趙星銀訳、ドルベゲ、2013年）、p.251。
- 4 藤田は1996年10月、丸山の逝去に際して書いた弔辞で、「超国家主義の論理と心理」をはじめ丸山の戦前から戦後初期に限った論文を丸山の5大論文として挙げている（藤田省三「弔辞—丸山眞男追悼」『戦後精神の経験・2』（藤田省三著作集・8、みすず書房、

- 1998年)、p.683) この選定をめぐって趙星銀(2014)は、「敗戦直後の混乱期に接した丸山経験が藤田に与えた至大な影響」とともに、「以降の時代明確になる藤田の丸山への競争意識や距離感が窺える」と言う。趙星銀「丸山眞男と藤田省三一認識するということの意味」『現代思想』第42号(2014年8月、青土社)、pp.190-191。
- 5 藤田省三「安楽への全体主義」『全体主義の時代経験』(藤田省三著作集・6、みすず書房、1997年)、p.36。
 - 6 本堂明「藤田省三氏の声の方位について―独立精神とは何か」『現代思想』第32巻第2号(青土社、2004年) p.85。
 - 7 本稿は、藤田思想の時期区分について、飯田泰三(1998)・和田悠(2004)・乳深公佑(2006)の観点を従う。すなわち、『精神史的考察』(1981)を分岐点にして、「天皇制国家の支配原理」(1956)から1971年法政大学を辞め、「浪人時代」に入るまでの時期を藤田思想の「前期」とする。そして、10年間の思想的模索期を経て、『精神史的考察』と晩年の全体主義論にたどる時期を「後期」とする。これに加えて、本稿は、藤田思想の「前期」の中で「天皇制国家の支配原理」(1956)から「嶋中事件」が起きる1961年2月までを切り取り、「初期」として区分けする。なぜなら、この「初期」において、藤田は「戦後の終焉」と「高度成長」の到来に当たって「自分の分極」を感じ、「古典の探求」など思想的転換への模索を始めるためである。これは、藤田思想の形成において独自の意義を持つと考えられる。
 - 8 市村弘正、「解説-藤田省三を読むために」『藤田省三セレクション』(平凡社、2010年)、p.408。
 - 9 藤田は「戦後の議論の前提」(1981)で、「戦後の思考の前提は経験であった。どこまでも経験であった」と断言した上で、「僅か三十数年前に多義的関連に満ちた『経験』の時代があった」と言う。藤田省三「戦後n議論の前提」『精神史的考察』(『藤田省三著作集・5、みすず書房、1997年)、pp.187-205。
 - 10 宮村治雄「或る普遍主義者の戦後経験―追悼藤田省三」『思想』2003年9月号(岩波書店)、pp.58-69。飯田泰三「藤田省三の時代と思想」『現代思想』第32巻第2号(青土社、2004年)、pp.68-82。
 - 11 藤田省三「天皇制国家の支配原理」『天皇制国家の支配原理』(『藤田省三著作集・1)、みすず書房、1997年)、pp.56-57。
 - 12 1955年以来、各経済指標が戦前の水準を回復することにつれて「もはや『戦後』ではない」という認識が拡散され、いわゆる「戦前派」・「戦中派」・「戦後派」がそれぞれ自分たちの戦争体験をもとにして「戦争責任」や世代間の「断層」をめぐる論争が展開された。その際、藤田がいったように、「戦後派」が自分たちないし新しく登場した新中間層の価値意識・行動原理として用いたのが「実感」という概念である。横尾夏織「『実感』論争と『思想の科学』」(『社学研論集』16号、2010年)、p.148。
 - 13 藤田省三「実感の意味」『現代思想』第32巻第2号(青土社、2004年)、pp.40-44。初出：『講座現代芸術 第5巻』「月報2」(勁草書房、1958年4月、第2配本)。
 - 14 藤田省三「新品文化」『精神史的考察』(『藤田省三著作集・5)、みすず書房、1997年)、pp.1-3。
 - 15 藤田省三「戦後の議論の前提」前掲書、pp.188-191。
 - 16 林達夫 監修『哲学事典』(平凡社、1971年)、p.391。
 - 17 市村弘正 前掲論文、pp.416-417。
 - 18 林達夫 監修 前掲書、p.391。
 - 19 藤田省三「或る喪失の経験」前掲書、p.30。
 - 20 ヘーゲルの『精神現象学』における「経験」によった意識の自己運動については、加藤尚武(ほか)編『ヘーゲル事典』(弘文堂、1992年)、pp.127-128、飯泉佑介「ヘーゲル哲学における『我々』」『倫理学年報』第67集(日本倫理学会、2018年)、pp.135-148を参照した。
 - 21 藤田省三「第2版へのあとがき」『天皇制国家の支配原理』(藤田省三著作集・1、みすず

- 書房、1998年)、p.296。
- 22 藤田省三・広松保「思想史の再検討」『藤田省三対話集成・2』（みすず書房、2006年）、pp.10-19。（初出 - 『法政大学新聞』1957年6月5日・6月15日）
- 23 藤田省三・徐京植「三つの全体主義の時代」『全体主義の時代経験』（『藤田省三著作集・6』、1997年）、p.209。
- 24 飯田泰三「藤田省三の時代と思想」『戦後精神の光芒』（みすず書房、2006年）、p.252。
- 25 藤田省三・石牟礼道子「文化と風土と人間」『石牟礼道子全集・7』（藤原書店、2005年）、pp.453-460。
- 26 藤田省三「諸先生のこと」『戦後精神の経験・2』（『藤田省三著作集・8』、みすず書房、1998年）、pp.664-666。
- 27 藤田省三「諒闇の社会的構造」『天皇制国家の支配原理』（藤田省三著作集・1、みすず書房、1998年）、pp.254-260。
- 28 藤田省三・徐京植 対談「戦後文化世代の最終走者として」『藤田省三対話集成・2』（みすず書房、2006年）、p.352。
- 29 飯田泰三 前掲書、p.252。
- 30 趙星銀 前掲論文、p.189。
- 31 藤田は徐京植との対談で、幼年期自分の家の雰囲気をごう述べている。藤田省三・徐京植 前掲対談、p.354。
- 32 丸山眞男・石田雄・藤田省三「討論 - 近代日本における異端の諸類型」『異端論断章』（『藤田省三著作集・10』、みすず書房、1997年）、p.98。
- 33 飯田泰三 前掲書、p.253。
- 34 丸山眞男・石田雄・藤田省三 前掲討論、p.99。
- 35 丸山眞男『丸山眞男座談・2』（岩波書店、1998年）、p.235。
- 36 藤田省三「反体制の思想運動」『戦後精神の経験・1』（『藤田省三著作集・7』、みすず書房、1998年）、pp.74-75。
- 37 趙星銀 前掲論文、pp.192-193。
- 38 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『現代政治の思想と行動』（未来社、1964年）、p.25。
- 39 丸山眞男「軍国支配者の精神形態」前掲書、p.129。
- 40 藤田省三「天皇制とファシズム」前掲書、pp.155-156。
- 41 大正時代末期プロレタリア運動の方向転換が議論される過程において、当時日本共産党の理念的リーダーとして登場した福本和夫が、山川均が提唱した大衆運動との結びつきを重視する「方向転換論」について、「経済運動と政治運動との相違を明確にしない折衷主義であり、組合主義である」と批判し、運動を政治闘争に発展させるためには、理論闘争によって労働者の外部からマルクス主義意識を注入する先鋭な前衛党による理論闘争と政治闘争が必要だと説いたことを言う。藤田省三「昭和8年を中心とする転向の状況」『転向の思想史的研究』（『藤田省三著作集・2』、みすず書房、1997年）、pp.6-25。
- 42 藤田省三 前掲書、pp.8-14。
- 43 藤田省三「大衆崇拜主義批判の批判」『戦後精神の経験・1』（『藤田省三著作集・7』、みすず書房、1997年）、p.121。
- 44 藤田は「具体の弁証法」という原理について自ら定義したことはない。ところが、丸山思想における「近代的主体」や、マルクス主義における「人民」など、「想定された抽象的概念」ではなく、あくまでも実在する「具体」に着目し、これに対する抽象化の過程を経て、再び具体的現実に戻す「具体 - 抽象 - 具体」という弁証法的思惟は、本稿のⅡ-1で取り上げた「実感」に関する思惟など藤田の論考でよく窺えることだと言える。
- 45 藤田は「自己の函数化」を「観察と行動において『自分』を一つの要素化して対象に含ませる認識論」として命題化している。藤田省三「或る歴史の変質の時代」、『精神的考察』（『藤田省三著作集・5』、みすず書房、1997年）、p.158。言い換えれば、「自分」が認識の主体でありながら同時に対象の中にも含まれていることを認める際、すなわち自分

- を他の要素や諸条件とともに一つの函数と見なすことで普遍的精神が成立するということである。市村弘正（2010）のまとめを借りると、「自己の函数化」とは、「他なる諸要素が自己の存立条件となる限り、すべての認識が自己に係る」のを認めることであり、「それを認識し尽くす自己客観化」である。市村は「自己の函数化」とは、こうした過程を通して成立する「他者認識」であると言う。市村弘正 前掲論文、p.417。
- 46 藤田省三「『現代日本の思想』の思想と書評」、前掲書、p.42。
- 47 藤田省三 前掲書、pp.46-48。
- 48 藤田省三「天皇制とは何か」『天皇制国家の支配原理』（『藤田省三著作集・1』、みすず書房、1998年）、p.2。
- 49 『近代日本思想史講座』第2巻『正当と異端』は結局刊行されなかった。『異端論断章』は、丸山がなくなった後、自宅で発見された藤田の発表原稿と討論記録を収めたものである。宮村治雄「解題」『異端論断章』（『藤田省三著作集・10』、みすず書房、1997年）、pp.141-158。
- 50 藤田省三・丸山眞男・石田雄 前掲討論、p.110。
- 51 藤田省三・丸山眞男・石田雄 前掲討論、pp.113-115。
- 52 趙星銀 前掲論文、pp.194-195。
- 53 藤田省三「現在反アカデミズムの構造」『戦後精神の経験・1』（『藤田省三著作集・7』、みすず書房、1998年）、pp.140-141。
- 54 藤田省三「『昭和8年』を中心とする転向の状況」『転向の思想史的研究』（『藤田省三著作集・2』、みすず書房、1997年）、前掲書、pp.22-23。
- 55 藤田省三 前掲書、p.18。
- 56 小熊英二「貧乏と単一民族」『民主と愛国』（新曜社、2002年）、pp.287-292
- 57 藤田省三「『現代日本の思想』の思想と書評」『戦後精神の経験・1』（『藤田省三著作集・7』、みすず書房、1998年）、p.43。
- 58 藤田省三「喜劇的狀況の問題性」前掲書、p.148。
- 59 マーティン・コリック「省三さんとの37年」『みすず』（2003年10月号、みすず書房）、p.16。
- 60 藤田省三「市民の義務」ということ一六・四統一行動に思う」『藤田省三著作集・7』（みすず書房、1998年）、pp.207-208。
- 61 藤田省三「ゼロからの出発」前掲書、pp.225-226。
- 62 藤田省三「『昭和20年、27年』を中心とする転向の状況」『転向の思想史的研究』（『藤田省三著作集・2』、みすず書房、1997年）、pp.296-298。
- 63 丸山眞男「国民主義の『前期的』形成」『丸山眞男集・2』（岩波書店、1995年）、p.268。
- 64 丸山眞男「8.15と5.19」『丸山眞男集・8』（岩波書店、1995年）、pp.362-363。
- 65 1960年12月、雑誌『中央公論』に掲載された深沢七郎の風刺小説「風流夢譚」のなかで皇室にたいするテロ行為の夢（切られた皇太子の首がスッテンコロコロと転がった、という描写を含む）が描かれていたことに憤激した17歳の大日本愛国黨員小森一孝が、1961年2月1日、中央公論社社長の嶋中鵬二郎を襲い、お手伝いさんの丸山かねを刺殺し、嶋中夫人には重傷を負わせた事件である。藤田は、これに対して「当事者優位の原理—テロリズムと支配者への抗議」を『思想の科学』に寄せた。ところが、この事件に対して嶋中社長は「お詫び」を發表し、当時同社から発行されていた『思想の科学』の「天皇制特集」号（1962年1月号）を破棄することになった。藤田は、これに対して「自由からの逃亡批判」を書き、「思想の科学研究会」側の妥協的な対応を批判し、ついには研究会にも脱会届けを出した。飯田泰三「藤田省三の時代と思想」『戦後精神の光芒—丸山眞男と藤田省三を読むために』（みすず書房、2006年）、pp.261-262。
- 66 飯田泰三・宮村治雄・本堂明 編「藤田省三著作目録」『戦後精神の経験・2』（藤田省三著作集・6、みすず書房、1997年）、pp.745-747。
- 67 藤田省三「天皇制とファシズム」『天皇制国家の支配原理』（『藤田省三著作集・1』、みすず書房、1998年）、pp.192-193。

- 68 藤田省三「人民主権の精神的一条件」『戦後精神の経験・1』（藤田省三著作集・7、みすず書房、1997年）、pp.382-383。
- 69 藤田省三「『断章』序」『現代史断章』（『藤田省三著作集・3』、みすず書房、1997年）、序文Ⅷ。
- 70 藤田省三「戦後の議論の前提」『精神史的考察』（『藤田省三著作集・5』、みすず書房、1997年）、pp.188-191。
- 71 藤田省三は、この表現を「ある歴史の変質の時代」（1976）で、自由民権運動の指導者だった板垣退助が、日露戦争以降に「ただの抽象的膨張欲としての日本の帝国主義」に浸潤していくことを批判する際に使っている。藤田省三「或る歴史の変質の時代」、『精神史的考察』（『藤田省三著作集・5』、みすず書房、1997年）、pp.153-154。
ところが、藤田が「具体的（自己）規定と限定とを失った、ただの抽象的な欲求」と規定した帝国主義的精神構造は、1970年代以降の日本社会に台頭した戦争責任への否定や、日本企業による海外への新植民地的進出などにも当てはまるものであろう。また、こうした欲求は、藤田が現代における「安楽への全体主義」を支えるものとして名づけた「全ての不快の素を無差別に一掃への衝動」にもつながるものであろう。
- 72 박홍규「마루야마 마사오와 일본주의」『정치사상연구』제 21 집제 2호 (2015년 가을, 한국정치사상학회)、pp.35-39。
- 73 丸山眞男「日本思想史における『古層』の問題」『丸山眞男集・11』（岩波書店、1995年）、p.222。
- 74 小熊英二「総力戦と民主主義」『民主と愛国』（新曜社、2002年）、p.101。
- 75 藤田省三「市村弘正『都市の周辺』をめぐって」『精神史的考察』（『藤田省三著作集・5』、みすず書房、1997年）、pp.153-154。
- 76 藤田省三「松陰の精神史的意味に関する一考察」前掲書、p.107。
- 77 藤田省三「史劇の誕生」前掲書、p.77。
- 78 藤田省三「ある喪失の経験」前掲書、p.10-45。
- 79 藤田省三・徐京植「三つの全体主義の時代」『全体主義の時代経験』（藤田省三著作集・6、みすず書房、1997年）、p.191。
- 80 市村弘正 前掲論文、p.422。
- 81 藤田省三「全体主義の時代経験」『全体主義の時代経験』（藤田省三著作集・6、みすず書房、1997年）、pp.85-86。
- 82 小尾俊人「『みすずセミナー』前後」『みすず』（2003年10月号、みすず書房）、p.13。
- 83 白智立「留学生からみた藤田先生」前掲書、pp.31-32。
- 84 藤田省三「『精神史的考察』平凡社版あとがき」『戦後精神の経験・2』（『藤田省三著作集・8』、みすず書房、1998年）、p.427。
- 85 冨山一郎「場の論理のために一中井正一の『委員会』と藤田省三の『研究会』」『理論と動態』第12号（社会理論・動態研究所、2019年）、p.5。
- 86 冨山一郎 前掲論文、pp.6-8。

Abstract

The principle in the formation of Fujita Shozo's concept of 'Experience' and Its Evolvement

Gyesam YI

Shozo Fujita (1927-2003) was a Japanese thinker and intellectual historian. From the late 1950s, taught by Masao Maruyama, he started his study on the history of ideology by researching the formation and development of the modern imperial system of Japan, so-called Tennose, and in the 1990s, he summarized the history of Japan during the modern and contemporary times as an "Era-Experience of Totalitarianism".

Based on his background and experiences during the chaotic post-WWII era, Fujita had established his own ideology of 'experience' upon the principles of 'challenge against the age', 'dialectic of materialization', and 'self-functionalization', while he was dissenting with Maruyama Masao's modernism which had a huge ideological influence on him as well as Marxism.

Moreover, since the 1970s, when the movement to prevent US-Japan Security Treaty failed and radical changes emerged in the mental structure of Japanese society from the high advance in the economy after then, Fujita defined the modern history during the 20th Century as the 'era-experience of totalitarianism', with the concept of 'loss of experience' at the center.

He has built his own ideas that cannot be converged on the genealogy of the Maruyama school, and his critiques on modern Japan's national system as well as psychological structure can have a universal significance in interpreting contemporary Japan too.

